下の原遺跡

福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第52集

2008

春 日 市 教 育 委 員 会

序

春日市は、弥生時代のクニのひとつである奴国の中心地として全国的に広く知られている土地であります。全国的に著名な遺跡が多いことは、これまでの数多くの発掘調査の成果から周知のことと存じます。しかし、これら発掘調査の多くは開発行為によって行われる遺跡の破壊でもあります。このことは、人々の暮らしの中で文化財行政の直面する重要な課題であり、今後とも文化財保護を訴えなければなりませんが、やむを得ず保存できない文化財については発掘調査を行い、記録保存に努め、後世に伝え残して行くことも重要であると考えています。

今回の調査は、宅地造成による緊急発掘調査です。下の原遺跡周辺は、これまでほとんど発掘調査が行われておらず、遺跡の性格はよくわかっていない地区であります。したがって、今回の発掘調査でその歴史的変遷の一端が垣間見られればと思います。

本書の内容を通して郷土の埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただき、また、今後の学術文化の向上に幾分とも寄与するものであれば幸いです。

最後に文化財保護にご理解とご協力をいただきました関係各位、並びに調査作業、整理作業に従事していただきました方々に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成２０年３月３１日

春日市教育委員会

教育長　**山　本　直　俊**

例　　言

１．本書は春日市教育委員会文化財課が平成18年度に行った、個人分譲住宅建設に伴う下の原遺跡の発掘調査報告書である。

２．遺構の実測は森井千賀子、吉田浩之が行い、製図は須﨑葉津子が行った。なお、製図にはＪＷ－ｃａｄを使用した。

３．遺物の実測と拓影作成は吉田と吉富千春が行い、製図も吉田と吉富が行った。

４．掲載写真は遺構を（有）空中写真企画、森井、吉田が撮影し、遺物については岡紀久夫（文化財写真工房）が撮影した。

５．本書に使用した地形図は国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』である。

６．本書の遺構実測図に用いた方位は座標北である。

７．本書で使用した図面、写真、遺物は春日市奴国の丘歴史資料館にて保管する。

８．本書の執筆および編集は、吉田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の内容 …… 5
　１．調査の概要 …… 5
　２．遺構 …… 6
　　⑴　方形周溝遺構 …… 6
　　⑵　掘立柱建物跡 …… 6
　　⑶　井戸 …… 6
　　⑷　溝状遺構 …… 10
　３．遺物 …… 10
　　⑴　土器 …… 10
　　⑵　円形土器片 …… 15

Ⅳ　まとめ …… 17
　１．方形周溝遺構について …… 17
　２．方形周溝遺構出土の土師器について …… 17
　３．方形周溝遺構出土の円形土器片について …… 18

図　版　目　次

図版１　⑴　下の原遺跡周辺航空写真（北から）
⑵　下の原遺跡全景東半
図版２　⑴　下の原遺跡全景西半
⑵　方形周溝遺構反転前
図版３　⑴　方形周溝遺構反転後
⑵　方形周溝遺構土層（南から）
図版４　⑴　井戸
⑵　方形周溝遺構　土師器出土状況（西から）
図版５　⑴　方形周溝遺構出土　土師器
図版６　⑵　方形周溝遺構出土　土師器
図版７　⑶　方形周溝遺構出土　土師器
⑷　方形周溝遺構出土　須恵器・陶磁器
図版８　⑸　方形周溝遺構出土　円形土器片
図版９　⑹　方形周溝遺構出土　円形土器片

挿　図　目　次

第１図　下の原遺跡周辺遺跡分布図（1/25000）　3
第２図　下の原遺跡位置図（1/2500）　4
第３図　下の原遺跡遺構配置図（1/100）　7
第４図　方形周溝遺構（1/80）　8
第５図　方形周溝遺構　土層図（1/20）　9
第６図　掘立柱建物跡（1/80）　9
第７図　井戸（1/40）　10
第８図　撹乱出土　瓦質土器（1/3）　10
第９図　溝状遺構出土　平瓦（1/3）　11
第10図　井戸出土　土師器（1/3）　11
第11図　方形周溝遺構出土　土師器（1/3）　12
第12図　方形周溝遺構出土　土師器（1/3）　13
第13図　方形周溝遺構出土　土師器（1/3）　14
第14図　方形周溝遺構出土　須恵器・陶磁器（1/3）　15
第15図　方形周溝遺構出土　円形土器片（1/3）　15

表　目　次

表１　下の原遺跡　土師器一覧表　16

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

平成18年６月、下白水北５丁目86、87、88、89番に個人分譲住宅建設の計画があるとの問い合わせがあり、遺構の有無を確認するため、平成18年６月12日に試掘調査を実施した。その結果、現地表下66cmから遺構が検出されたため、地権者と春日市教育委員会で埋蔵文化財保護に関する協議を行い、対象地409.97㎡のうち住宅建設によって破壊される238㎡を緊急発掘することとなった。本調査は平成18年８月21日に開始し、同年９月29日をもって終了した。

２．調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は下記の通りである。

発掘調査（平成18年度）

総括　春日市教育委員会	教　育　長	山本　直俊
	社会教育部長	鬼倉　芳丸
	文化財課長	結城　保雄
	管理担当	
	係　　長	戸渡　　隆
	事務主査	柚木　　泰
	事務主査	塩足　雅弘
	文化財担当	
	係　　長	丸山　康晴
	技術主査	中村　昇平
	技術主査	吉田　佳広
	技術主査	森井千賀子
	技術主任	境　　靖紀
	技術主任	井上　義也（～６月）
	嘱託職員	吉田　浩之
	嘱託職員	長谷部真弓

報告書作成（平成19年度）

教　育　長	山本　直俊
社会教育部長	鬼倉　芳丸
文化財課長	古賀　俊光
管理担当	
係　　長	渡辺　厚子
事務主査	塩足　雅弘
事務主事	北里ひとみ
文化財担当	
係　　長	丸山　康晴
技術主査	中村　昇平
技術主査	吉田　佳広
技術主査	森井千賀子
技術主任	境　　靖紀
嘱託職員	吉田　浩之
嘱託職員	長谷部真弓

なお、遺構・遺物について太宰府市教育委員会中島恒次郎氏にご教示賜りました。記して感謝申し上げます。

Ⅱ　位置と環境

下の原遺跡は下白水５丁目86～89番に所在する。

春日市は沖積平野である福岡平野の南東部にあり、地形的には丘陵・段丘・氾濫原で構成されている。市域の南には標高448ｍの牛頸山があり、そこから派生する北端丘陵部が春日丘陵となっている。また、春日丘陵の東部、西部では牛頸川・諸岡川によって流域に段丘が形成されている。

下の原遺跡は上述した地形の牛頸山から派生する春日丘陵の西側、中位段丘上に位置し、標高は26ｍ前後を測る。下の原遺跡周辺の遺跡分布は、古水遺跡・弥永原遺跡・中白水遺跡・門田遺跡など、弥生時代や中世を主体とする遺跡が確認されている。

春日市内の遺跡分布は旧石器時代の遺跡で、事例は少ないが門田遺跡・大谷遺跡・原遺跡などが確認されている。

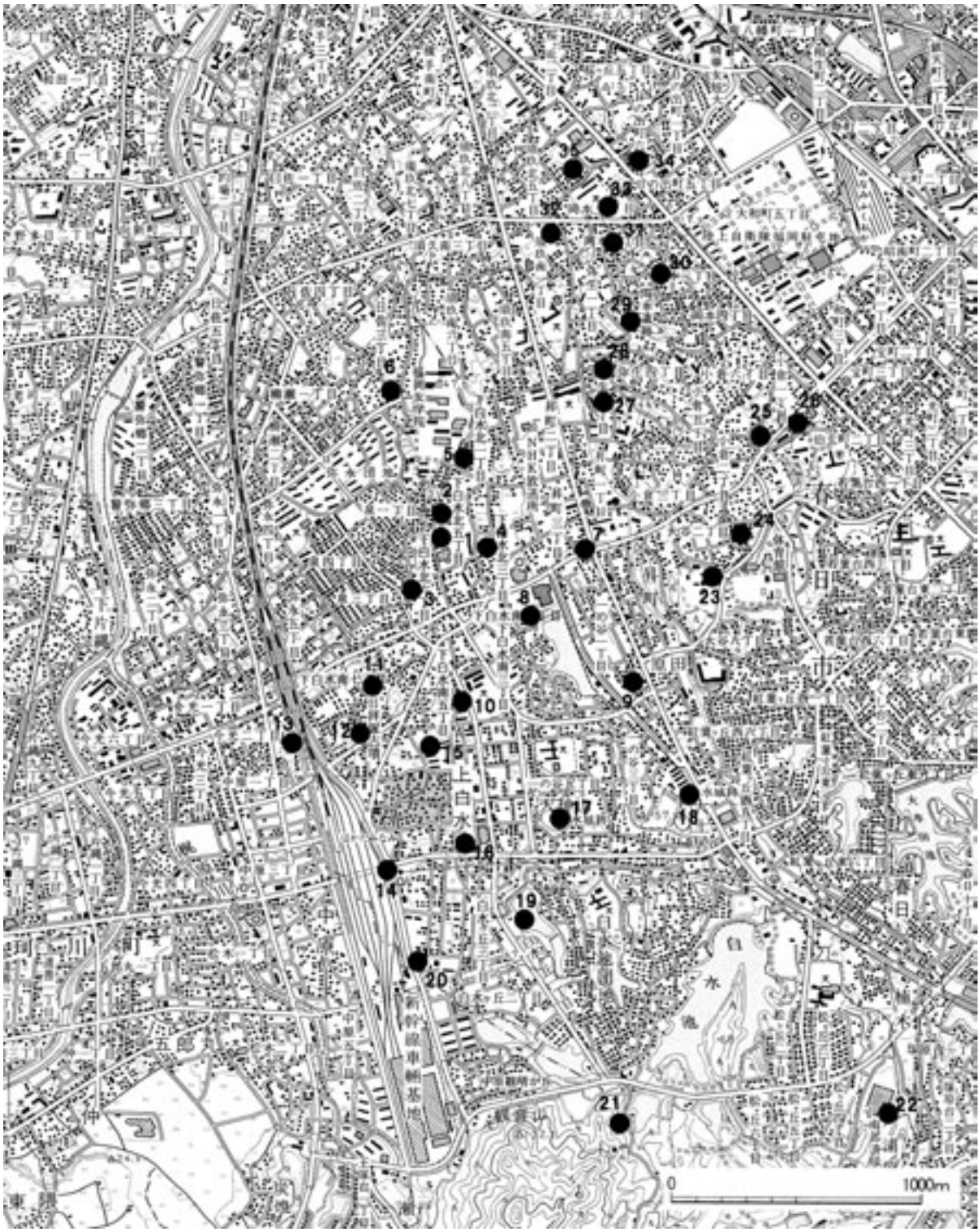
縄文時代の遺跡は、同じく事例は少ないが門田遺跡で草創期の爪形文土器が出土したのを筆頭に、後期から晩期の柏田遺跡が代表的な遺跡である。

弥生時代の遺跡は、奴国王墓が存在する著名な須玖岡本遺跡を中心に、一帯に弥生時代の主要な遺跡が密集して分布している。特に青銅器・ガラス・鉄器などの工房跡が密に展開され、弥生のテクノポリスの様相を顕著に示している。なお、当調査地の北に位置する弥永原遺跡では、弥生時代の墳墓群や集落を中心とした遺構が検出されている。

古墳時代の遺跡は、復元全長約47ｍの前方後円墳、下白水大塚古墳が調査地の北約40ｍに隣接して所在している。この古墳は本格的な発掘調査が行われておらず、詳細については不明な点が多い。築造時期についても６世紀後半から７世紀前半と推察されるが確定的ではない。

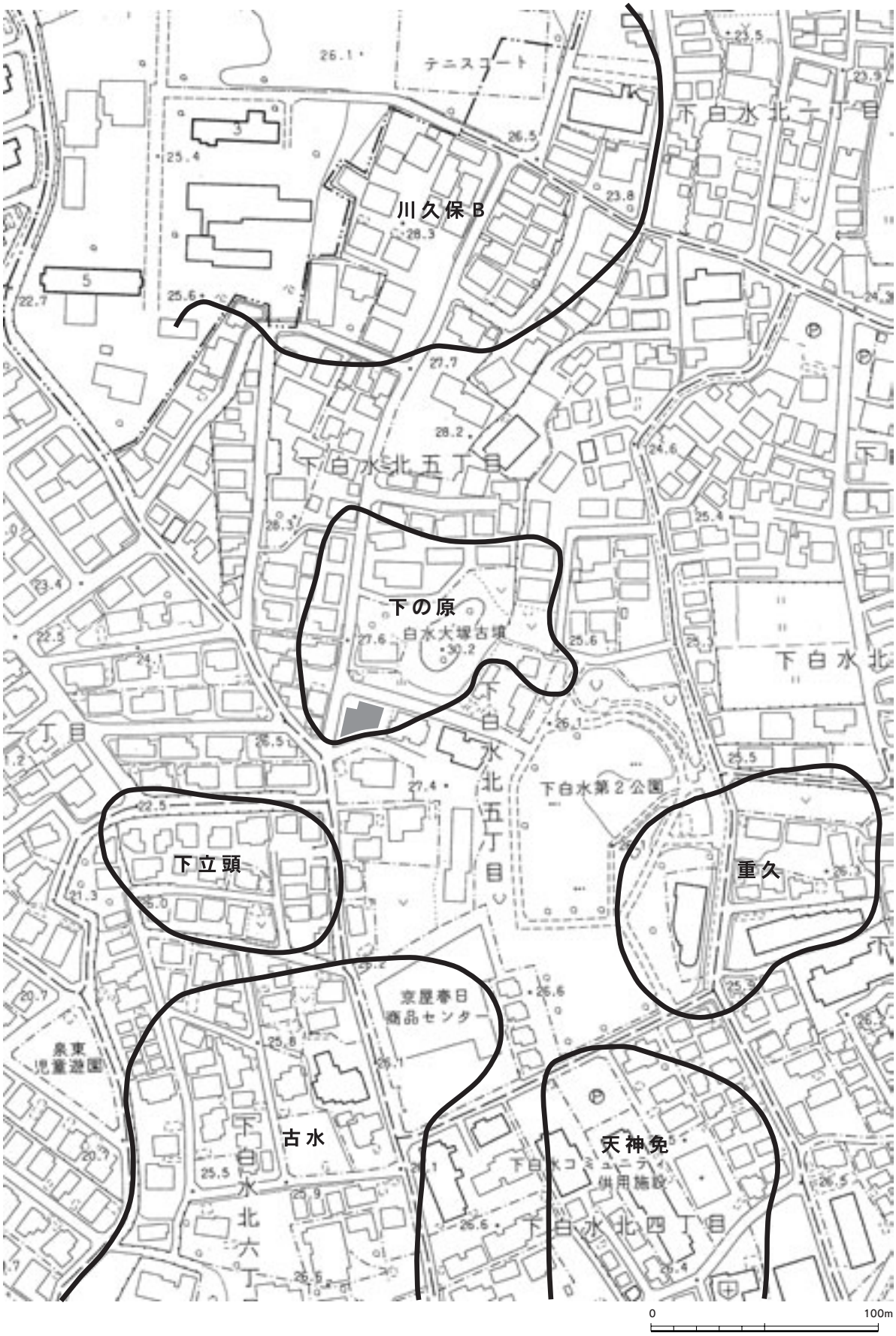
中世の遺跡は、『筑前国続風土記』に記述のある天浦城が当調査地の南方、字古水に推定されている。この天浦城については、文献資料に記述があるのみで推定地は大半が削平されていることもあり、詳細な調査は行われていないが、堀跡が昭和初期まで存在していたといわれている。また、さらに南側に目を向けてみると、中世の居館跡が確認された中白水遺跡が所在している。中白水遺跡では、四方に溝を巡らせる方形の区画や、掘立柱建物跡・井戸・方形周溝遺構等が検出され、中世白水村の一端を垣間見ることができる。

なお、下の原遺跡はこれまで発掘調査が行われておらず、周辺の調査事例も少ないため遺跡の性格等の詳細は不明な地域であった。今回の調査は空白地を埋める貴重な成果となった。



第１図　下の原遺跡周辺遺跡分布図（1/25000）

1．**下の原遺跡**
2．下白水大塚古墳
3．天浦城（推定地）
4．重久遺跡
5．川久保Ｂ遺跡
6．弥永原遺跡
7．宮の下遺跡
8．寺田池北遺跡
9．一の谷Ｂ遺跡
10．寺田・長崎遺跡
11．日拝塚古墳
12．辻畑遺跡
13．柏田遺跡
14．門田遺跡
15．中白水遺跡
16．天神ノ木遺跡
17．天神山水城跡
18．大土居水城跡
19．ウトグチ遺跡Ｂ地点
20．原遺跡
21．西浦古墳群
22．浦ノ原窯跡群
23．大谷遺跡
24．大南Ａ遺跡
25．仁大手Ａ遺跡
26．伯玄社遺跡
27．竹ヶ本遺跡
28．赤井手遺跡
29．平若Ａ遺跡
30．須玖盤石遺跡
31．須玖岡本遺跡（王墓）
32．須玖タカウタ遺跡
33．須玖岡本遺跡坂本地区
34．須玖永田Ａ遺跡
35．須玖五反田遺跡



第２図　下の原遺跡位置図（1/2500）

Ⅲ　調査の内容

１．調査の概要

平成18年６月、個人住宅建設分譲に伴う事前の試掘調査を行ったところ、ピット等の遺構が確認されたため、本調査を実施することとなった。これまで、当地周辺では発掘調査がほとんど行われておらず、遺跡の性格等も不明であった。

調査は土置き場の都合上、調査区内で反転調査をすることとし、まず調査区東半から行った。バックホウによる表土剥ぎを行ったところ、当地は現況が畑地となっていたことから、耕作土（黒色土）と黒褐色土が約50㎝ほど堆積していた。その後の発掘作業員による遺構検出の結果、調査区は北から南にかけて斜面になっており、調査区北端は南端より約140㎝ほど高い状況が看取された。これは調査区の北に隣接する下白水大塚古墳を頂部とする小丘陵の存在を示すものと思われる。

遺構は、方形の溝が巡る遺構（方形周溝遺構）、井戸、溝状遺構、ピット多数を検出した。方形周溝遺構は、調査区ほぼ中央で検出されたため反転調査によって遺構を２分することとなり、遺構の全体像を掴むのに苦労した。方形周溝遺構は、西側の「コ」字形の深い溝と東側の「Ｌ」字形の浅い溝によって方形周溝が構成されているが、主体部が存在すると想定される中央部は撹乱を受けていたため、遺構の性格を明確にすることは出来なかった。しかし、遺構の規模と形状から、市内でも類例のある中世の方形周溝墓と想定し、作業を進めた。遺物は土師器の皿・坏が周溝から集中して出土した。それら遺物の上層には礫や河原石などが散見されたが、これが主体部から流出したものか、廃棄されたものか、祭祀に使用されたものかは確認できなかった。

反転後の調査区西半は、方形周溝遺構の西半、掘立柱建物跡、ピット多数を検出した。掘立柱建物跡からは遺物の出土はなく、時期は不明であるが、切り合い関係から方形周溝遺構に前出するものであった。

調査した2006年は雨が多く、台風も福岡に直撃したため周溝内からは水が間断なく湧き出て調査が遅れたが、９月29日をもって作業を終了した。

２．遺構

⑴　方形周溝遺構（図版２（２）、図版３（１）（２）、第４図、第５図）

方形周溝遺構は、調査区中央で検出された。周溝は、ほぼ真北に当たる箇所に設けられた幅0.9ｍの陸橋と、ほぼ真南に当たる箇所に存在する井戸によって、西側の「コ」字形の溝と、小溝を含めた東側の「Ｌ」字形の溝に分けられる。遺構の規模は、西辺が長さ5.9ｍ、東辺が井戸や小溝を含めて長さ7.7ｍ、北辺が陸橋を含めて長さ6.0ｍ、南辺が井戸を含めて5.5ｍのほぼ方形である。溝幅は0.5～1.9ｍ、深さは0.1～0.9ｍを測る。溝の深さは、調査地の地形が北から南にかけて0.4ｍ程度斜面になっている事もあり、地表面からの深さに若干の差異が認められるが、方形周溝遺構の西側「コ」字形の溝で深さ約0.9ｍの断面逆台形を呈する。溝底は一定の深さで、傾斜はしておらず、標高24.85ｍ前後である。それに対し東側「Ｌ」字形の溝は、深さ0.1～0.2ｍと西側に比べてかなり浅く、溝底の標高は25.5ｍ前後を測る。このように、西側の「コ」字形の溝と東側の「Ｌ」字形の溝は深さにおいてかなりの違いが確認され、別々の遺構である可能性もある。しかし、遺構検出の状況と両溝の覆土から、同一の遺構と考えている。

なお、方形周溝遺構の南東角には井戸、東側には溝幅0.5ｍ、深さ0.1ｍの小溝が検出されたが、井戸は方形周溝遺構と切り合い関係が認められず、小溝も方形周溝遺構を切ってはいるが、出土した土師器に方形周溝遺構出土遺物との時期差はなく、方形周溝遺構に併設されていたものと考えられる。なお、主体部が想定される場所は近世の溝２条によって撹乱、削平されており不明であった。各地の中世方形周溝遺構を参考にすると、土壙墓などの主体部が想定されうる。

出土遺物は、西側溝で主に土師器の坏と小皿が中層から下層にかけて出土した。上層には河原石と思われる直径20㎝程度の丸石が数十個出土したが、石を配置した状況は看取されず、廃棄されたか流れ込んだものと思われる。これらの石は主体部に積石をしていた可能性も考えられるが、すでに主体部が消失しているため推測の域を出ない。なお、これらの石には梵字等の文字や加工痕は確認されなかった。東側溝からは西側溝と同様の土師器が出土したが、河原石は出土していない。

⑵　掘立柱建物跡（図版２（１）、第６図）

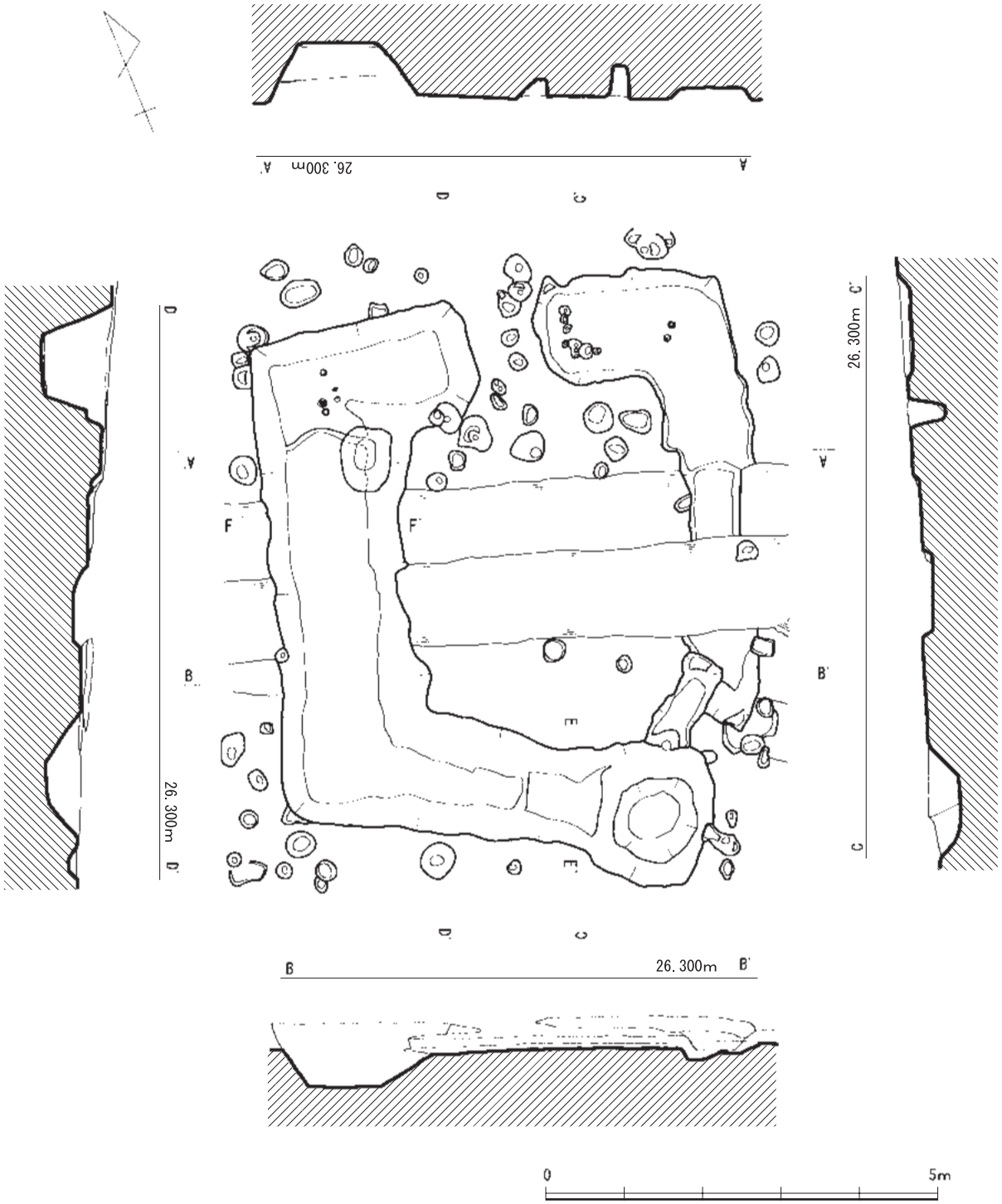
掘立柱建物跡は、調査区中央西側で検出された。一部のピットが方形周溝遺構に切られており、これに先行するものである。３間×３間の12本柱の建物と考えられるが、南東のピット２基は消失している。ピットの直径は35㎝前後で、深さは20～50㎝前後である。

出土遺物に図示できるものはなかった。

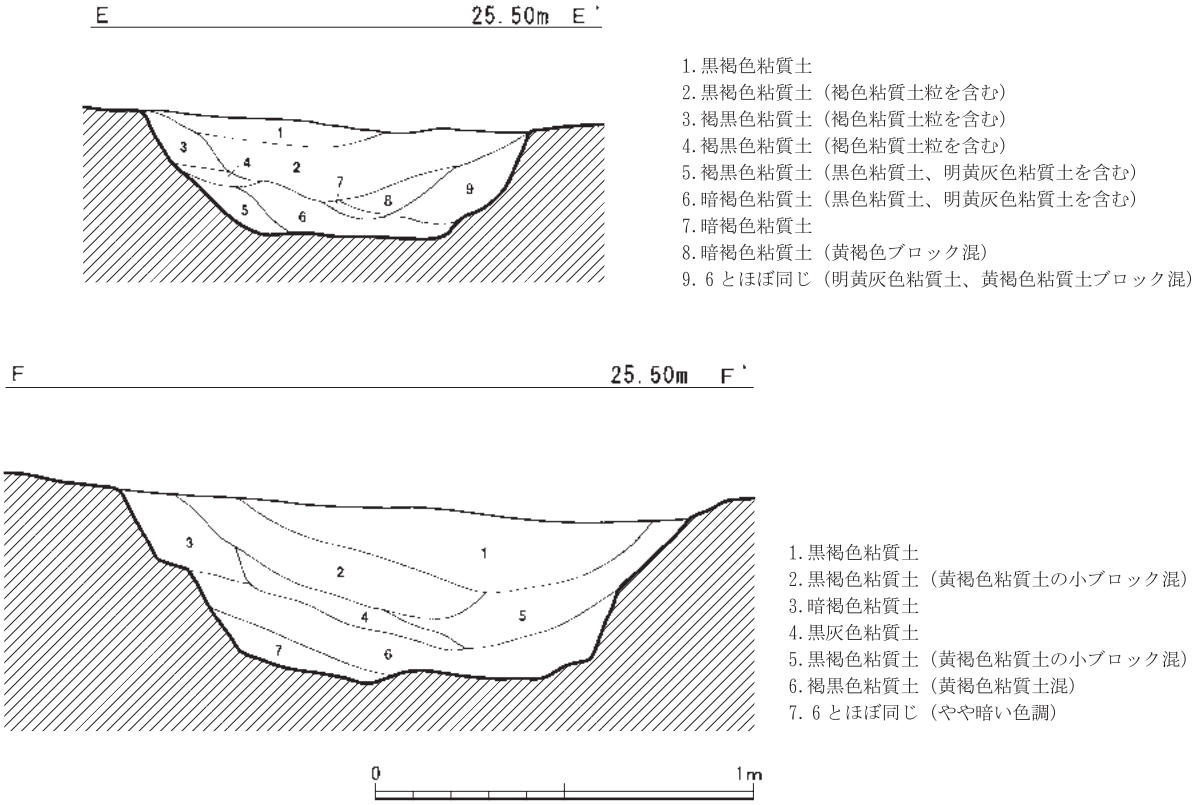
⑶　井戸（図版４（１）、第７図）

井戸は、調査区中央南の方形周溝遺構南東角に検出された。方形周溝遺構と井戸は検出時で確認された覆土は同一であり、平面精査の結果、溝の一部が円形プランを呈していたため、井戸の可能性を

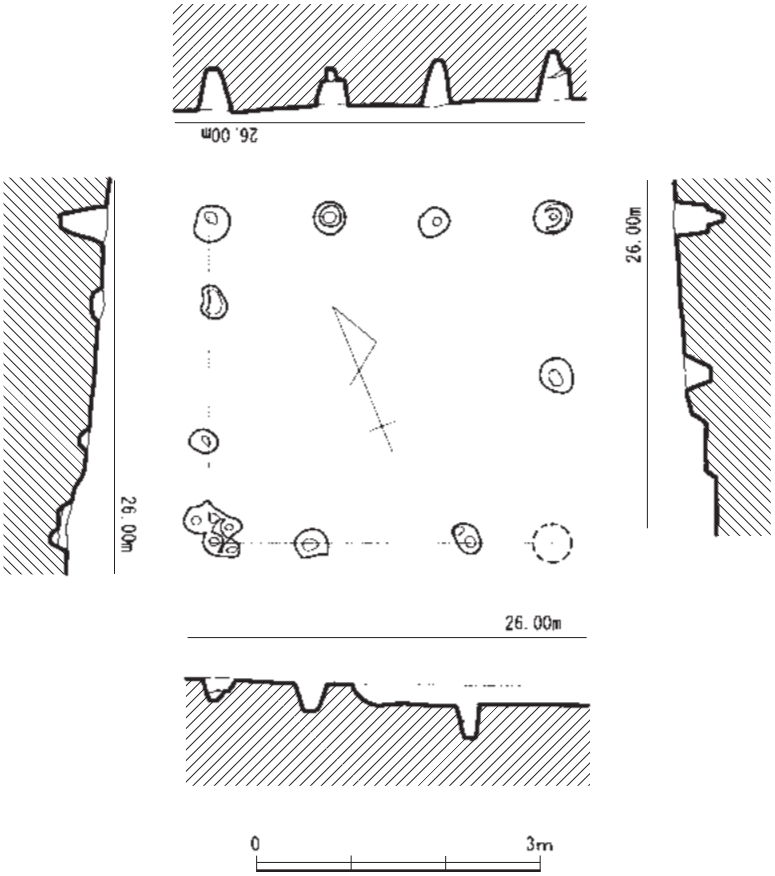
第３図　下の原遺跡遺構配置図（1/100）



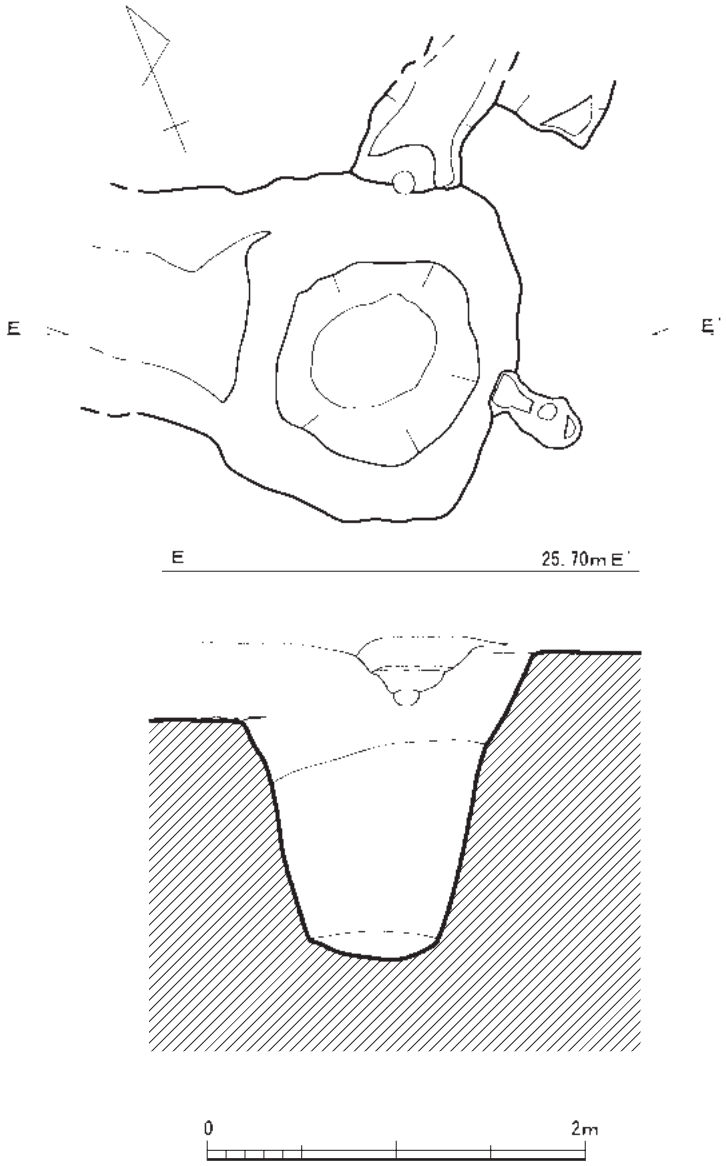
第４図　方形周溝遺構（1/80）



第５図　方形周溝遺構 土層図（1/20）



第６図　掘立柱建物跡（1/80）



第７図　井戸（1/40）

考え、切り合い関係を確認しながら５㎝ずつ掘り下げた。しかし、方形周溝遺構の溝底に至るまで、両者の覆土は変わらず、先後関係が認められなかった。

井戸は直径約1.7ｍの不整楕円形を呈する。深さ約1.6ｍ、方形周溝遺構の溝底からは深さ約1.3ｍである。底面は不整楕円形で直径約0.6ｍである。

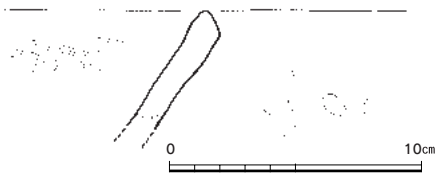
出土遺物は方形周溝遺構と同様に土師器坏が出土している。

⑷　溝状遺構

溝状遺構は調査区北側で検出された。東西に直線的に走る溝で、東端で南に屈曲し、二股に分かれる。幅は0.3～1.4ｍ、深さは0.1～0.2ｍを測る。溝底のレベルは傾斜しておらず、ほぼ一定である。

出土遺物に古代の平瓦と思われるものが出土しているが、他に遺物がほとんど出土していないこともあり、遺構の詳細な時期や性格は不明である。

３．遺物

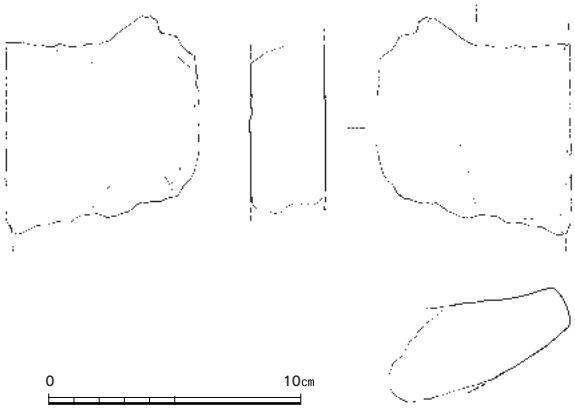


第８図　撹乱出土 瓦質土器（1/3）

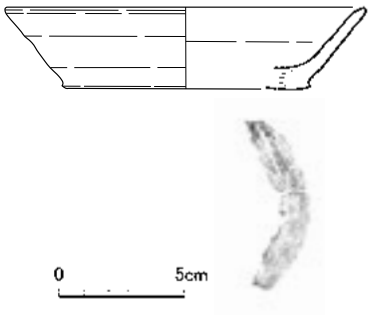
⑴　土器（図版５～７、第８～14図）

撹乱出土　土器（第８図）

方形周溝遺構を切る形で東西に走る溝状の撹乱から出土した瓦質土器鉢である。内外面ともにハケ目が残り、外面には指頭圧痕も残る。淡黄色。



第９図　溝状遺構出土 平瓦（1/3）



第10図　井戸出土 土師器（1/3）

溝状遺構出土　瓦（第９図）

溝状遺構からは、平瓦の小片が出土した。内外面ともに磨滅が激しく調整は不明である。やや厚みがある。明褐色を呈する。古代の遺物と思われる。

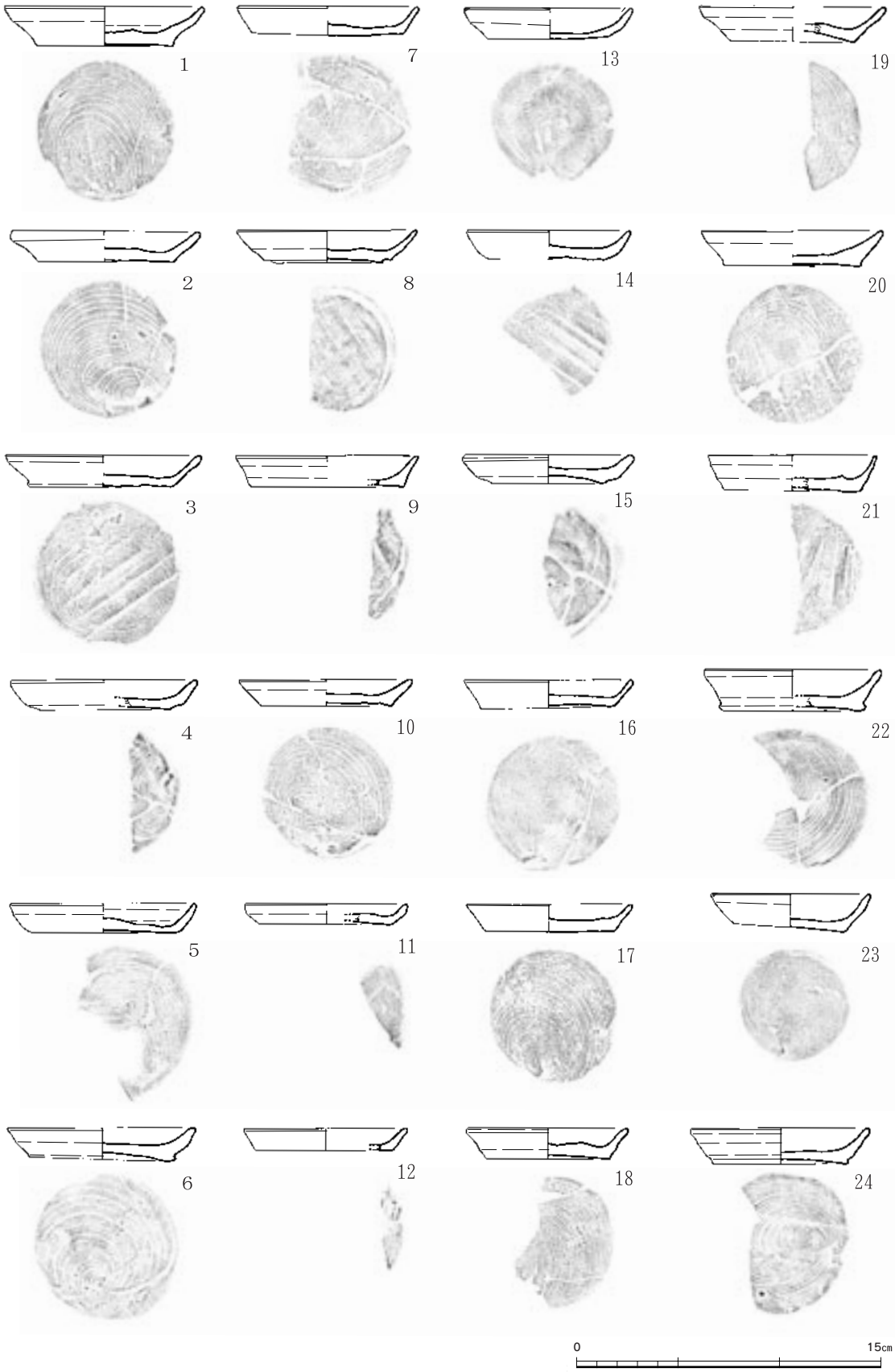
井戸出土　土器（第10図）

井戸からは土師器が１点出土した。大宰府出土土師器形態分類の坏ａで、復元口径14.1cm、器高3.2cm、復元底径9.6cmを測る。底部糸切りで板状圧痕がみられる。

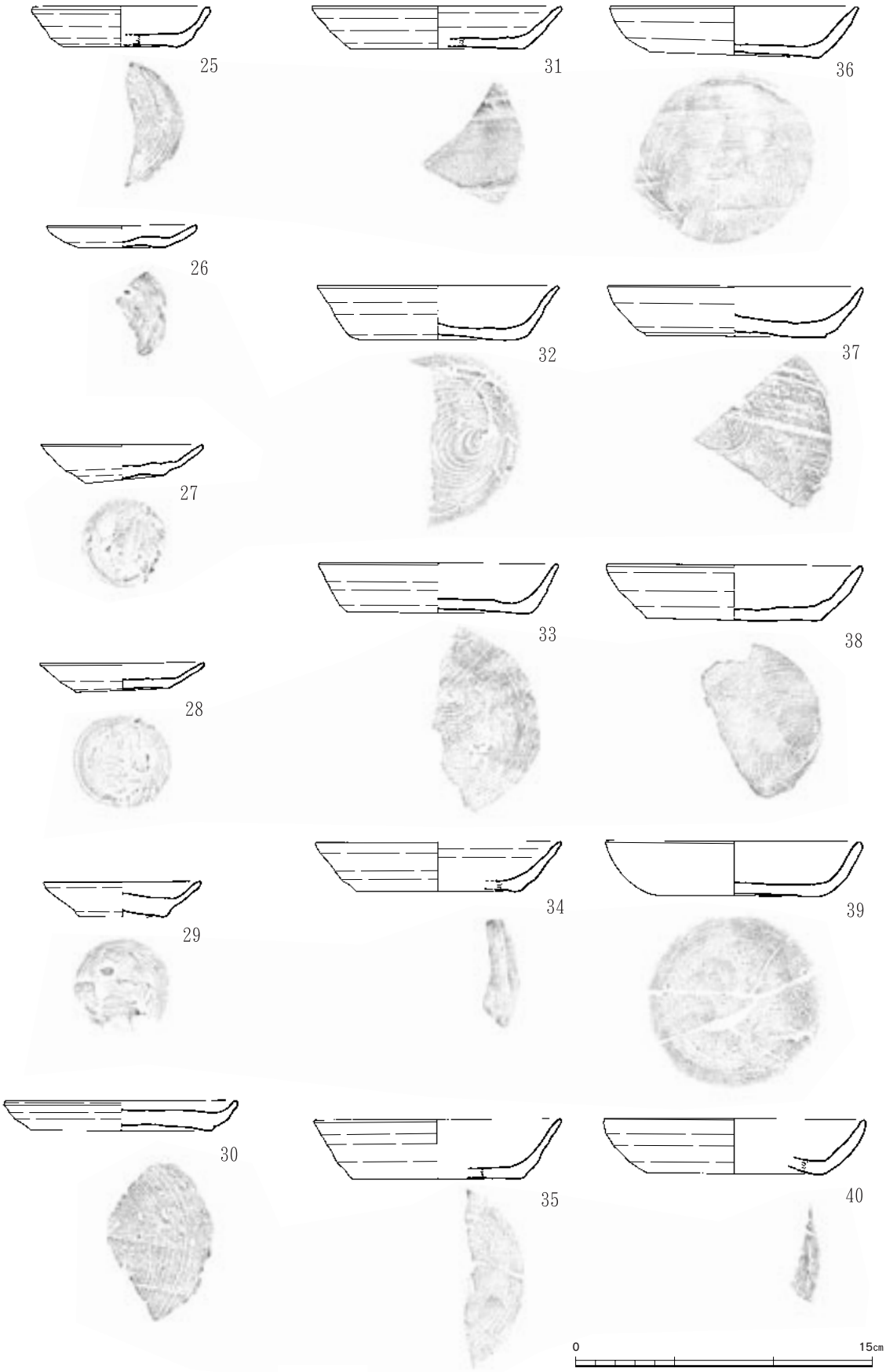
方形周溝遺構出土　土器（図版５～７、第11～14図１～57）

１～55はいずれも土師器である。１～29は土師器の小皿、30～55は土師器の坏である。当遺跡では大きく小皿４種、坏３種に分類できる。１～22は大宰府出土土師器形態分類の小皿ａ、23～25は小皿ｂ、26～29は坏ｂと同じ技法で作られた小皿ａ（坏ｂ技法）である。なお、小皿ａとした19～22は小皿ａと小皿ｂの中間的な形態をとった小皿ａ-ｂと思われる。小皿ａは、口径7.9～9.7cm、器高1.0～2.0cm、底径5.5～7.4cmで、平均口径8.6cm、平均器高1.56cm、平均底径6.6cmを測る。小皿ｂは口径7.9～8.7cm、器高1.75～2.0cm、底径5.4～6.7cmで、平均口径8.4cm、平均器高1.85cm、平均底径5.9cmを測る。小皿ａ（坏ｂ技法）は、口径7.5～8.3cm、器高1.15～1.95cm、底径3.9～4.8cmで、平均口径8.0cm、平均器高1.6cm、平均底径4.2cmを測る。いずれも底部糸切りで、３、８、14、15、20、21に板状圧痕がみられる。13、23は口縁部付近に煤が付着している。小皿ａ、小皿ａ（坏ｂ技法）、小皿ｂは方形周溝遺構中層～下層にかけて一括して出土しており、明確な時期差はあまりないと思われる。

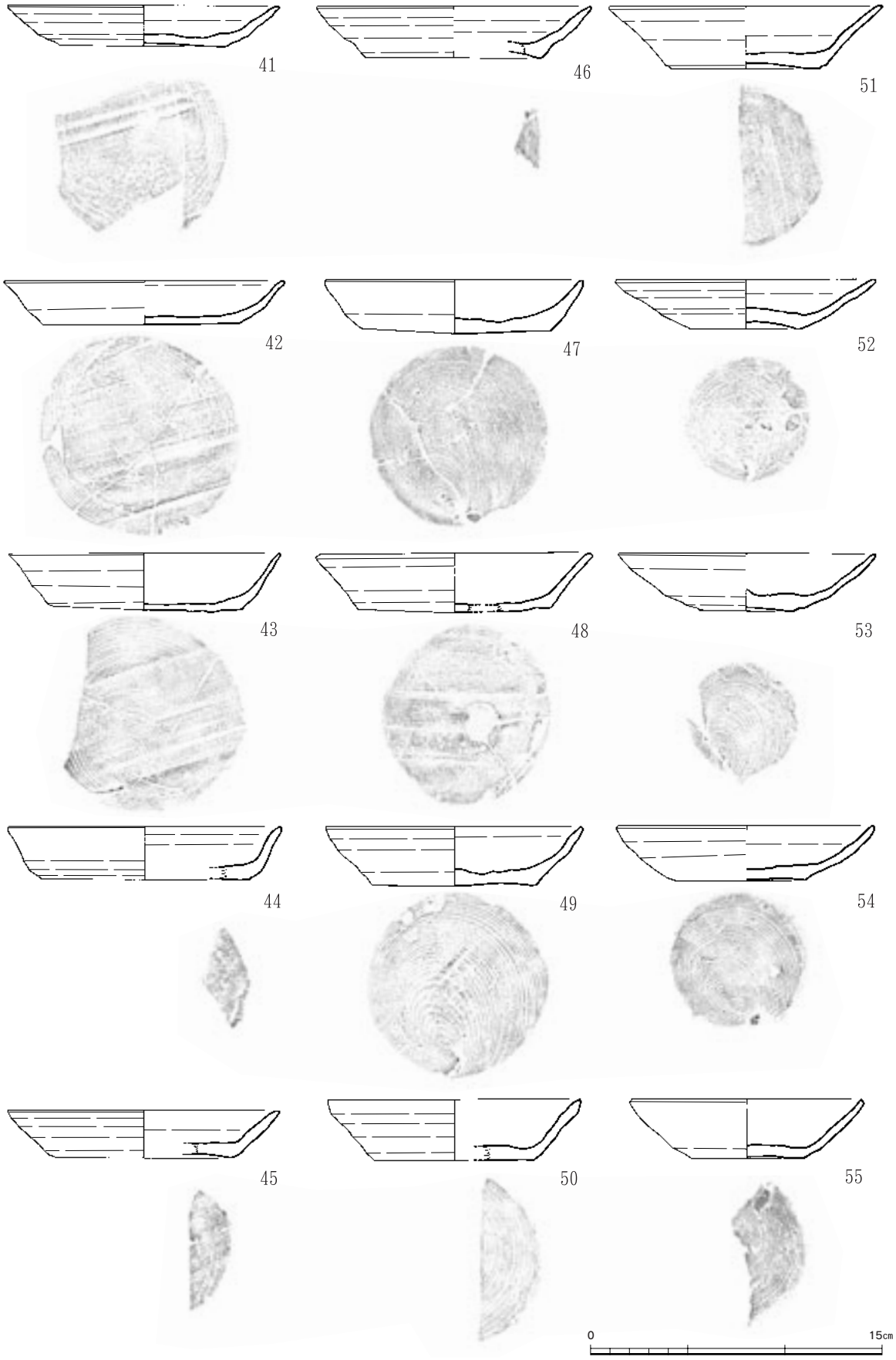
30～55の坏は、大宰府出土土師器形態分類の坏ａと坏ｂ、その中間的な型式と考えられる坏ａ-ｂが出土した。30～43は坏ａで、口径10.5～13.9cm、器高1.5～2.95cm、底径6.7～10.1cmで、平均口径13.4cm、平均器高2.5cm、平均底径8.7cmを測る。なお、42、43は口径が大きく、他の坏よりもやや先行するものと考えられる。44～51は坏ａ-ｂで、口径12.8～14.1cm、器高2.4～3.2cm、底径7.7～12.6cmで、平均口径13.6cm、平均器高2.8cm、平均底径9.2cmを測る。52～55は坏ｂで、口径11.8～13.4cm、器高2.5～3.1cm、底径4.8～6.5cmで、平均口径12.8cm、平均器高2.8cm、平均底径5.7cmを測る。いずれも底部糸切りで、31、34、36、37、41、42、43、44、48、51には板状圧痕がみられる。坏も小皿と同様に方形周溝遺構の中層～下層にかけて一括して出土している。56は、須恵器の壺か甕の底部片である。復元



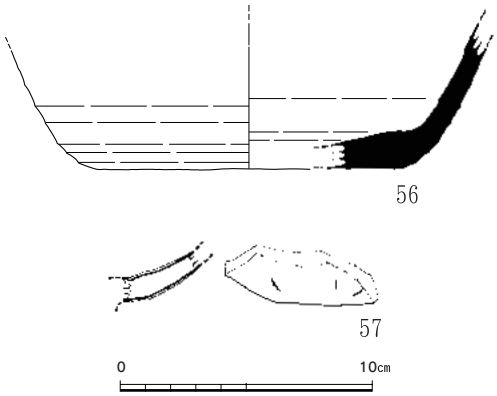
第11図　方形周溝遺構出土 土師器（1/3）



第12図　方形周溝遺構出土 土師器（1/3）



第13図　方形周溝遺構出土 土師器（1/3）



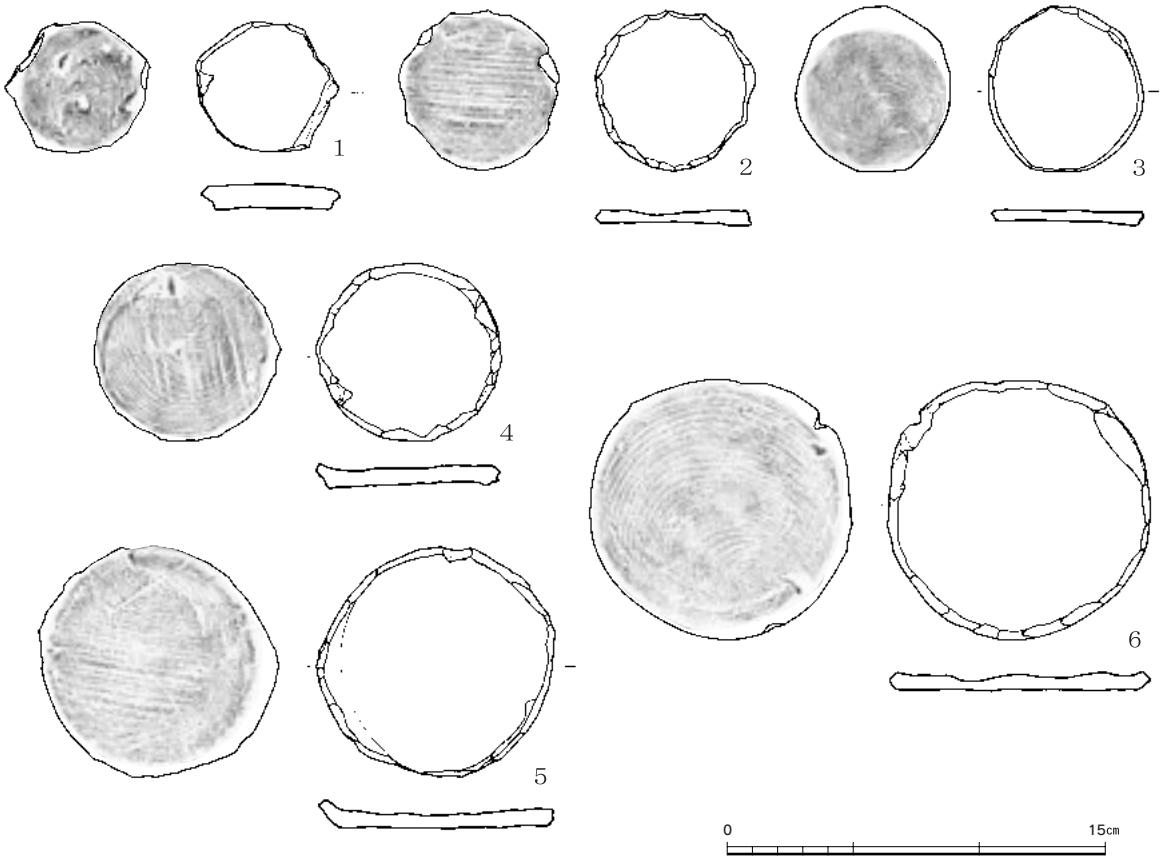
第14図　方形周溝遺構出土 須恵器・陶磁器（1/3）

底径12.0cmで底部糸切りである。灰褐色を呈し、内面には回転ヨコナデ、底部外面には回転ヘラケズリを施す。小片のため産地や時期を特定するには至らなかったが、おおよそ古代の遺物と思われる。

57は、龍泉窯系青磁椀Ⅱ-ｂ類の底部小片である。釉が厚く掛かり、貫入が多い。外面には鎬蓮弁文が施され、釉色は黄色味を含む緑色である。

(2)　円形土器片（図版８、９、第15図１～６）

１～６は土師器の小皿と坏の底部の周辺を打ち欠いて円形に仕上げた円形土器片と思われる。１は底径4.7cm、厚さ1.0cmで割と厚み



第15図　方形周溝遺構出土 円形土器片（1/3）

がある。２は底径6.0cm、厚さ0.3～0.6cm、３は底径5.7cm、厚さ0.5cm、４は底径6.4cm、厚さ0.7cm、５は底径8.2cm、厚さ0.6cm、６は底径9.7cm、厚さ0.4～0.7cmである。いずれも底部糸切りで、２、４、５には板状圧痕がみられる。この他、下の原遺跡では土師器を利用した円形土器片と思われる遺物が方形周溝遺構中層～下層で計30点出土しており、図化できた土師器１～55と時期差がないものと考えられる。ただ、円形土器片と判断するには明確な加工痕が認められなければならないが、ここで円形土器片としたほとんどがその根拠に乏しい。そのため口縁周辺が故意に打ち欠かれ、円形土器片として使用したものかどうかの判断は難しく、ここでは円形土器片の可能性があるという不確定な報告にとどめたい。

表１　下の原遺跡　土師器一覧表

遺物番号	器　種	口　径	器　高	底　径	内底部ナデ	板状圧痕	備　考
1	土師器・小皿ａ	(9.4)	1.9	6.7	○	×	
2	土師器・小皿ａ	9.1	1.5	6.7		×	
3	土師器・小皿ａ	9.7	1.6	7.0	○	○	
4	土師器・小皿ａ	(9.1)	1.4	5.4	○	×	
5	土師器・小皿ａ	9.0	1.4	7.0		×	
6	土師器・小皿ａ	9.1	1.85	7.3		×	
7	土師器・小皿ａ	(8.8)	1.4	7.4	○	×	
8	土師器・小皿ａ	(8.8)	1.6	5.8	○	○	
9	土師器・小皿ａ	(8.9)	1.55	7.4	○	×	
10	土師器・小皿ａ	8.5	1.2	6.4	○	×	
11	土師器・小皿ａ	(7.9)	1.0	(6.6)		×	
12	土師器・小皿ａ	(8.0)	1.1	(6.7)		×	
13	土師器・小皿ａ	8.1	1.6	6.0	○	×	煤付着
14	土師器・小皿ａ	(8.0)	1.4	(5.6)	○	○	
15	土師器・小皿ａ	(8.1)	1.4	5.5	○	○	
16	土師器・小皿ａ	8.2	1.45	6.5		×	
17	土師器・小皿ａ	8.1	1.35	6.4	○		
18	土師器・小皿ａ	(7.9)	1.5	6.1		×	
19	土師器・小皿ａ-ｂ	(9.1)	1.7	6.1		×	
20	土師器・小皿ａ-ｂ	(8.9)	1.7	6.7	○	○	
21	土師器・小皿ａ-ｂ	(8.2)	1.7	(6.6)	○	○	
22	土師器・小皿ａ-ｂ	(8.6)	2.0	(6.8)		×	
23	土師器・小皿ｂ	7.9	1.8	5.4		×	煤付着
24	土師器・小皿ｂ	(8.7)	1.75	(6.7)	○	×	
25	土師器・小皿ｂ	(8.8)	2.0	(5.7)	○	×	
26	土師器・小皿ａ-２	(7.5)	1.15	(4.1)		×	ロクロ水挽き
27	土師器・小皿ａ-２	8.2	1.95	3.9		×	ロクロ水挽き
28	土師器・小皿ａ-２	8.3	1.5	4.8		×	ロクロ水挽き
29	土師器・小皿ａ-２	(7.9)	1.75	(4.0)	○	×	内底部指頭圧痕、ロクロ水挽き
30	土師器・坏ａ	(11.6)	1.5	(9.0)	○	×	
31	土師器・坏ａ	(10.5)	2.1	(6.7)	○	○	
32	土師器・坏ａ	(12.2)	2.7	7.9	○	×	
33	土師器・坏ａ	(12.1)	2.5	9.2	○	×	
34	土師器・坏ａ	(12.4)	2.5	(8.3)	○	○	
35	土師器・坏ａ	(12.4)	2.95	(8.7)	○	×	
36	土師器・坏ａ	12.5	2.6	8.6	○	○	内底部指頭圧痕
37	土師器・坏ａ	(12.6)	2.5	9.1	○	○	
38	土師器・坏ａ	(12.7)	2.75	8.8		×	
39	土師器・坏ａ	12.8	2.7	8.1		×	
40	土師器・坏ａ	(13.1)	2.75	(8.7)		×	
41	土師器・坏ａ	(13.9)	2.05	8.6	○	○	
42	土師器・坏ａ	14.4	2.25	10.1	○	○	
43	土師器・坏ａ	14.0	2.9	9.9	○	○	
44	土師器・坏ａ-ｂ	(14.0)	2.7	(10.6)		○	
45	土師器・坏ａ-ｂ	(14.0)	2.4	(9.0)		×	
46	土師器・坏ａ-ｂ	(14.1)	2.6	(9.2)		×	
47	土師器・坏ａ-ｂ	(13.1)	2.7	9.4		×	
48	土師器・坏ａ-ｂ	(13.8)	3.0	9.9	○	○	
49	土師器・坏ａ-ｂ	(13.1)	3.0	8.4		×	
50	土師器・坏ａ-ｂ	(12.8)	3.1	(8.1)		×	
51	土師器・坏ａ-ｂ	(14.1)	3.2	7.7		○	
52	土師器・坏ｂ	(13.4)	2.5	5.8		×	
53	土師器・坏ｂ	(13.1)	2.9	4.8		×	
54	土師器・坏ｂ	13.1	2.85	6.5		×	
55	土師器・坏ｂ	(11.8)	3.0	5.65		×	

Ⅳ　ま と め

1．方形周溝遺構について

中世方形周溝遺構は、福岡県下では太宰府市石穴遺跡[1]、篠振遺跡[2]、筑紫野市剣塚遺跡[3]、上の浦遺跡[4]、小郡市津古土取遺跡[5]、干潟遺跡[6]、太刀洗町町口遺跡[7]、北九州市金丸遺跡[8]などが知られる。春日市域でも、伯玄社遺跡[9]、中白水遺跡、ウトグチＣ遺跡、整理池遺跡で中世の方形周溝遺構を検出している。これら方形周溝遺構の多くは、周溝あるいは壇状の高まりで区画された場所に直接遺体を埋葬する主体部が検出されることが多い。実際、中世区画墓の代表的な遺跡である静岡県一の谷遺跡[10]や佐賀県徳永遺跡９区[11]の主体部には土葬墓が検出されている。ただ、土葬墓などの主体部が検出されない事例もあり、遺構の性格は各遺跡によって異なるものと推察される。津古土取遺跡、石穴遺跡などは、火葬骨の検出状況から納骨あるいは散骨した場所としての性格が考えられ、篠振遺跡は、壇状の高まりの周辺に土葬墓が配されているため、方形の壇状遺構はモニュメントとしての性格が考えられている。当遺跡の場合、主体部が存在するであろう場所が撹乱されていたため土葬墓の墓壙が検出できず、火葬骨や壇状の高まりも確認されなかった。ただ、周溝内に石が多数出土した状況は主体部から流れ込んだものと推察され、主体部に津古土取遺跡のような集石遺構があった可能性が考えられる。また、当遺跡の方形周溝遺構は、陸橋が設けられ、方形周溝との関連性は断定できないが井戸が検出されたのは前述した通りである。陸橋は周溝内への入口と考えられるが、井戸は方形周溝遺構と関係があるならば、どのような役割を果たしているか現段階では類例もなく不明である。しかしながら興味深いのは、方形周溝遺構内で陸橋がほぼ真北に位置し、井戸がほぼ真南に位置する位置関係である。この配置は南北方向を意識したものと考えられ、井戸と方形周溝遺構が共伴関係にある可能性も示唆できる。とはいえ根拠に乏しく、方形周溝遺構と井戸の関係についてはこれからの資料の増加と研究の進展を待って検討したい。なお、溝の深さが東西で著しく異なる点、西側の溝がこれまでの類例よりも深すぎる点などは、浅学なためその意図を読み取ることはできなかった。

いずれにせよ、方形周溝遺構（あるいは壇状遺構）が中世の葬送儀礼に深く関係していることは周知の事実であり、当遺跡の方形周溝遺構も葬送儀礼に関係した遺構と推察できるのではないだろうか。

本来ならば、方形周溝遺構を論じるには周辺の集落の実態などを空間的に掴んで行うべきである。しかし、下の原遺跡の周辺はほとんど発掘調査が行われておらず、遺跡の性格が不明な地域であるため課題が多く残った。これからの周辺の調査成果に期待したい。

2．方形周溝遺構出土の土師器について

下の原遺跡で出土した土師器は図化しえたもので55点が出土した。これら下の原遺跡の土師器は、全体的な印象として大宰府で出土している土師器よりも糸切りや整形が粗雑で歪みが多く、洗練されていない印象である。方形周溝遺構の周溝内から出土した土師器の法量は、小皿ａで口径平均8.6㎝、坏ａで口径平均13.4㎝である。法量分布の中心は、小皿ａで口径7.5～8.9㎝の間に集中しており、坏

ａで口径12.0～13.0㎝を中心にするものと、14.0㎝前後のものの二者が存在している。大宰府出土土師器の法量分布[12]と比較すると、下の原遺跡の土師器はやや法量が大きく、必ずしも大宰府出土土師器と一致はしないが､おおよそ小皿は14世紀中頃､坏は14世紀後半頃の様相を示していると思われる。

なお、下の原遺跡では小皿ａ(坏ｂ技法)、坏ｂが出土している。これらは小皿ａ、坏ａと成形技法が異なる、轆轤水挽き技法で成形されたと思われる。また、下の原遺跡の場合、坏ｂの割合は坏ａと坏ｂの中間的な型式と思われる坏ａ-ｂを合わせると出土した坏の約４割を占め、大宰府条坊跡第83次SK070の坏ｂの出土状況と比較すると下の原遺跡の坏ｂの割合は多く、一概には言えないがやや時代が下るのかもしれない。坏ｂの出現時期を考慮に入れ、これらを総合的に看案すると、下の原遺跡の土師器はおおよそ14世紀後半～14世紀末頃の所産であると思われる。

３．方形周溝遺構出土の円形土器片について

円形土器片は、方形周溝遺構西側「コ」字形溝内の中層～下層にかけて30点出土した。全て土師器の底部周辺が欠損した円形のものである。これが、全て故意に打ち欠かれたものかどうかの判断は難しいが、多くは打撃が加えられて欠損したものと考えられる。円形土器片の大きさは使用した小皿や坏の大きさに比例しており様々である。当遺跡では円形土器片が周溝内に集中して出土しており、福岡市博多35次調査[13]や広島県草戸千軒町遺跡[14]で井戸や道路など特定の遺構に集中して出土している状況に類似しており興味深い。これまでこの種の土器片は中世の遺跡から出土することは知られていたが、その用途に関しては諸説あり明らかにされていない。ただ、下の原遺跡の出土例は方形周溝という信仰の対象になりうる遺構から出土しており、円形土器片が何らかの呪術に用いられた可能性が高いことを示唆している。柴尾俊介氏は北九州市金丸遺跡出土の円形土器片の用途について、邪気・穢気を祓う飛礫を想定しており[15]当遺跡の円形土器片も同様な用途が考えられるのかもしれない。

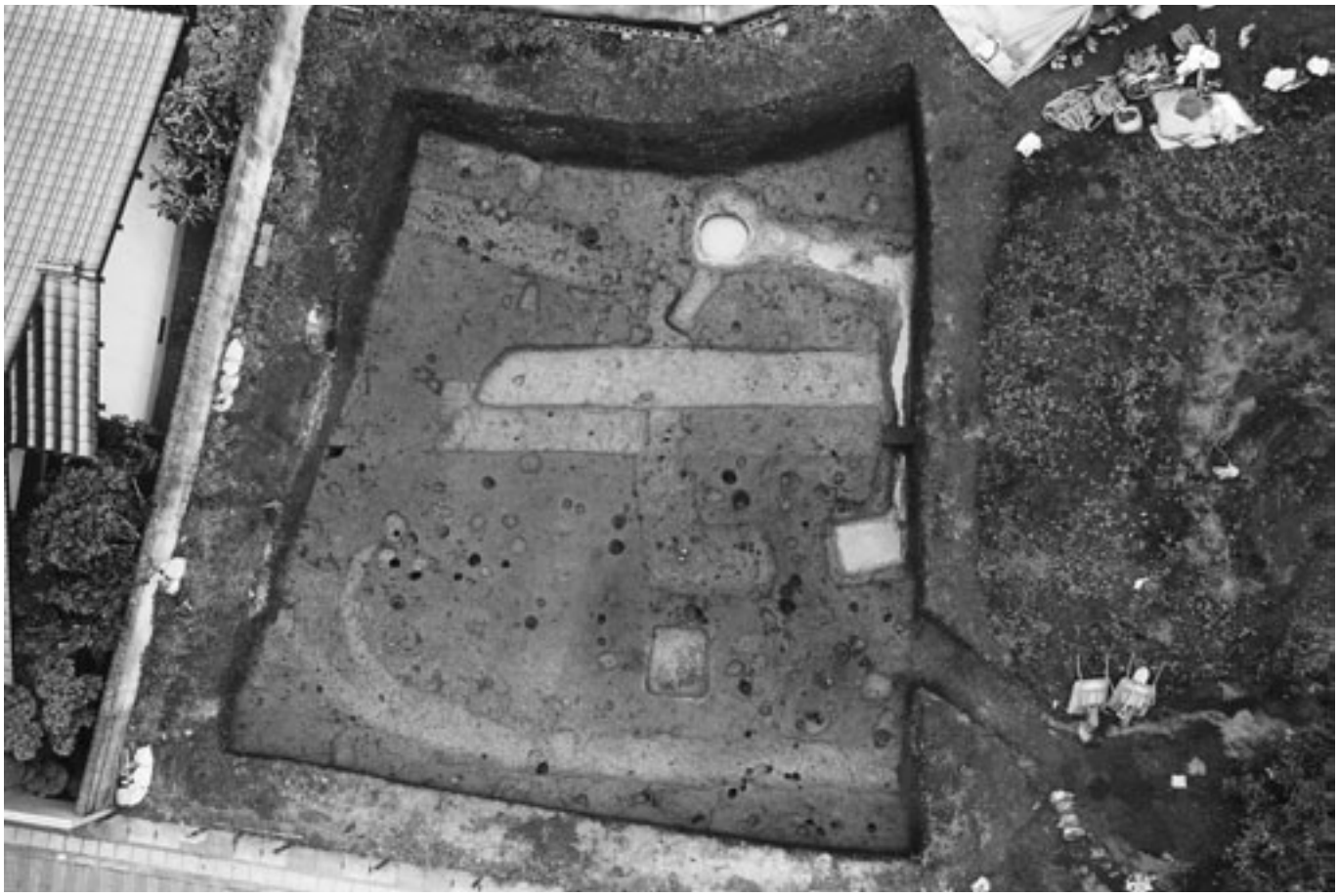
注

⑴　太宰府市教育委員会　『高雄地区遺跡群』　太宰府市の文化財　第22集　1994
⑵　太宰府市教育委員会　『篠振遺跡』　太宰府市の文化財　第11集　1987
⑶　福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ』　1978
⑷　筑紫野市教育委員会　『上の浦遺跡』　筑紫野市文化財調査報告書　第14集　1986
⑸　小郡市教育委員会　『津古土取遺跡』　小郡市文化財調査報告書　第59集　1990
⑹　福岡県教育委員会　『干潟遺跡Ⅰ』　福岡県文化財調査報告書　第59集　1980
⑺　福岡県教育委員会　『町口遺跡・西森田遺跡』　福岡県文化財調査報告書　第125集　1996
⑻　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　『金丸遺跡２』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第210集　1998
⑼　春日市教育委員会　『伯玄社遺跡』　春日市文化財調査報告書　第35集　2003
⑽　磐田市教育委員会　『一の谷中世墳墓群遺跡』　1993
⑾　佐賀市教育委員会　『徳永遺跡群Ⅱ　徳永遺跡９区』　佐賀市文化財調査報告書　第106集　1999
⑿　太宰府市教育委員会　『大宰府条坊跡ＸⅥ』　太宰府市の文化財　第52集　2002
⒀　福岡市教育委員会　『博多47-第67次調査報告-』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第396集　1995
⒁　広島県草戸千軒町調査研究所　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ』　1994・1995
⒂　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　『金丸遺跡２』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第210集　1998

図　　版

図版 1

(1)　下の原遺跡周辺航空写真（北から）

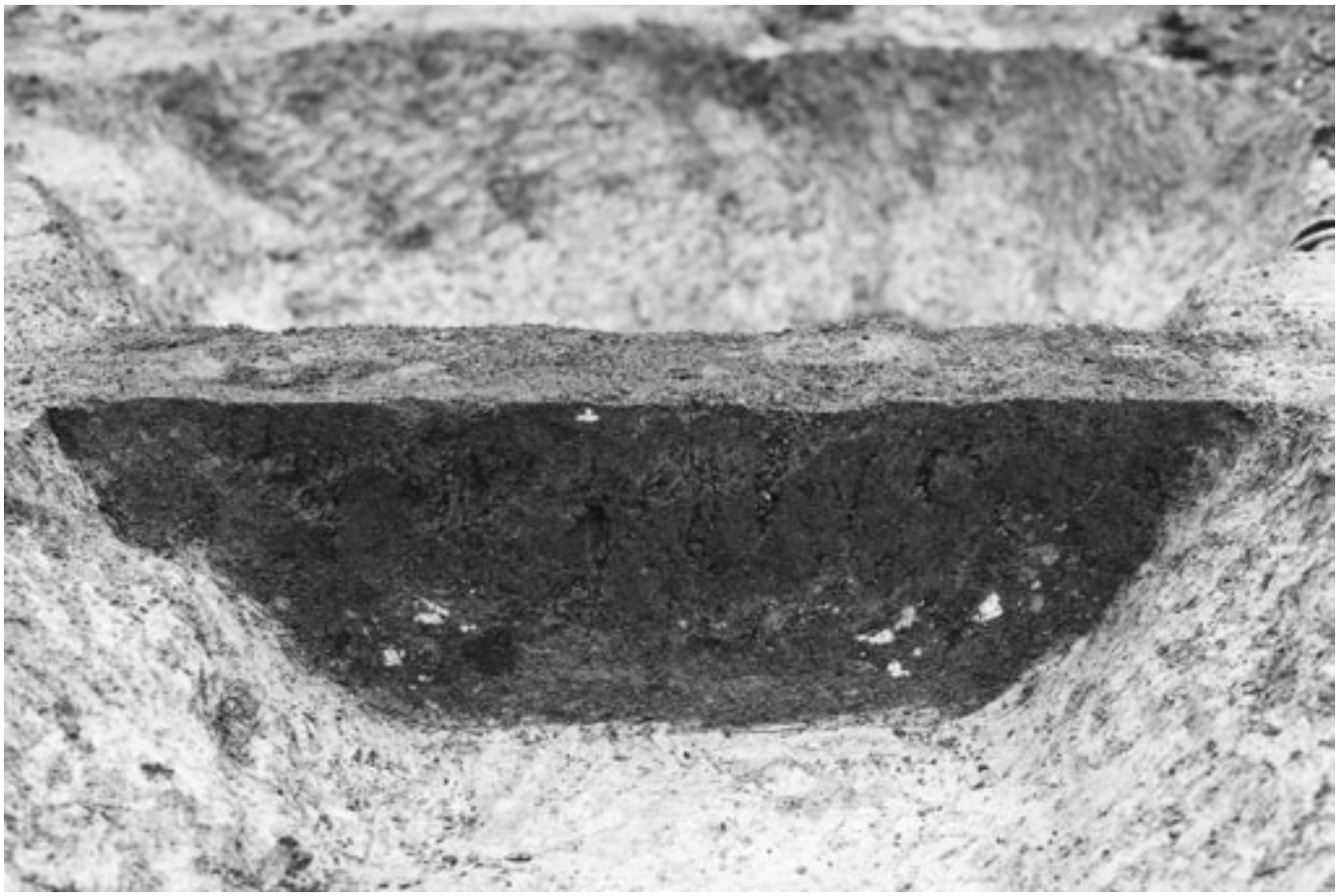


(2)　下の原遺跡全景東半

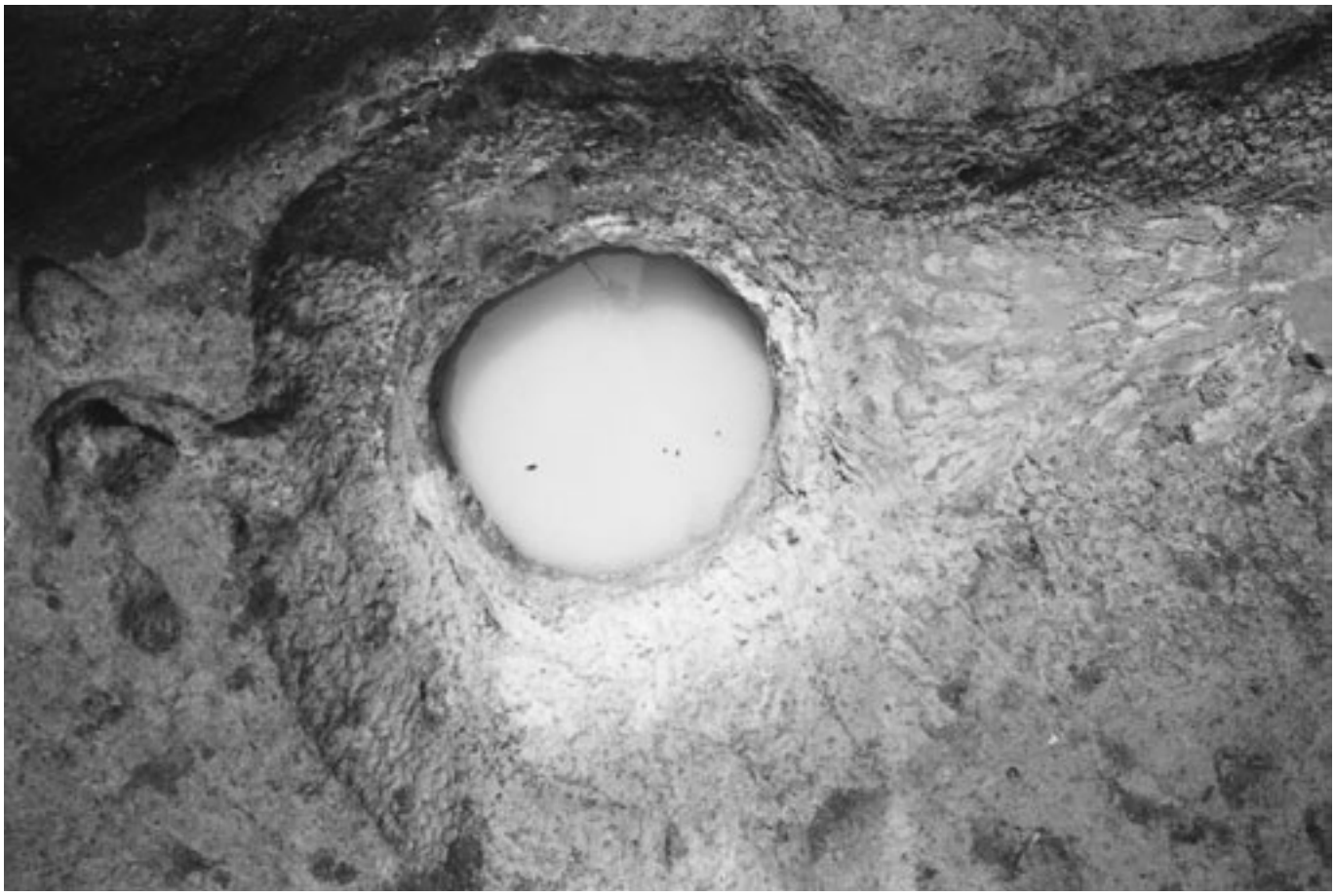
(1)　下の原遺跡全景西半

(2)　方形周溝遺構反転前

(1)　方形周溝遺構反転後



(2)　方形周溝遺構土層（南から）



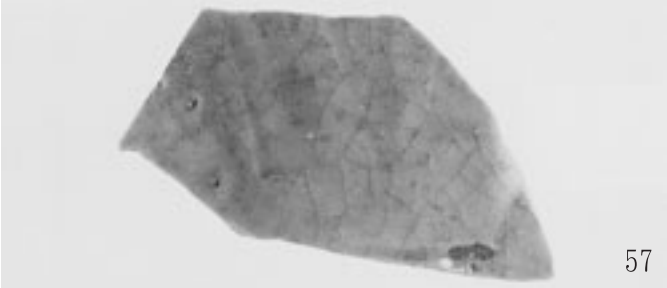
(1)　井戸

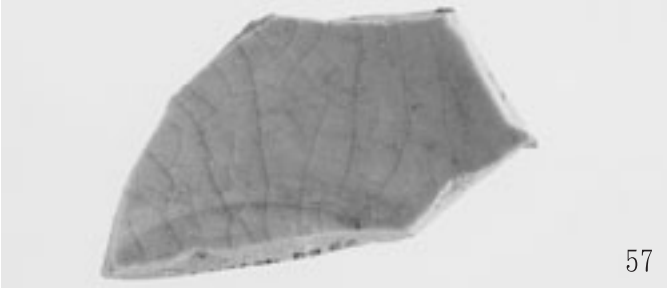
(2)　方形周溝遺構　土師器出土状況（西から）

(1)　方形周溝遺構出土　土師器

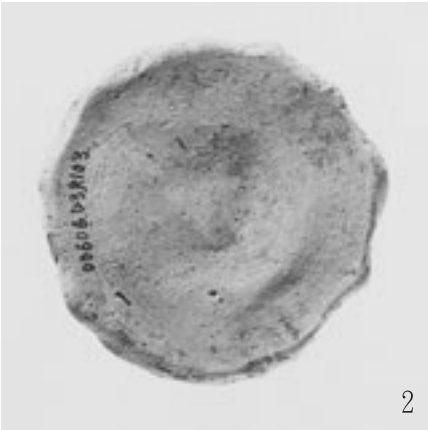
(2)　方形周溝遺構出土　土師器

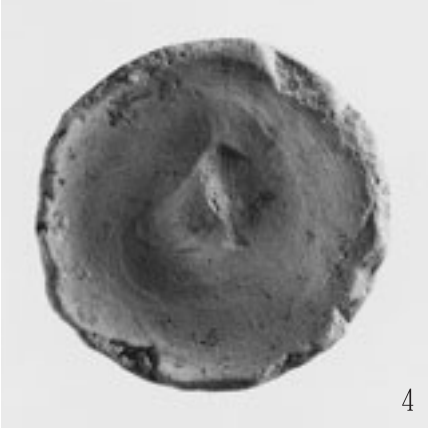
(3)　方形周溝遺構出土　土師器



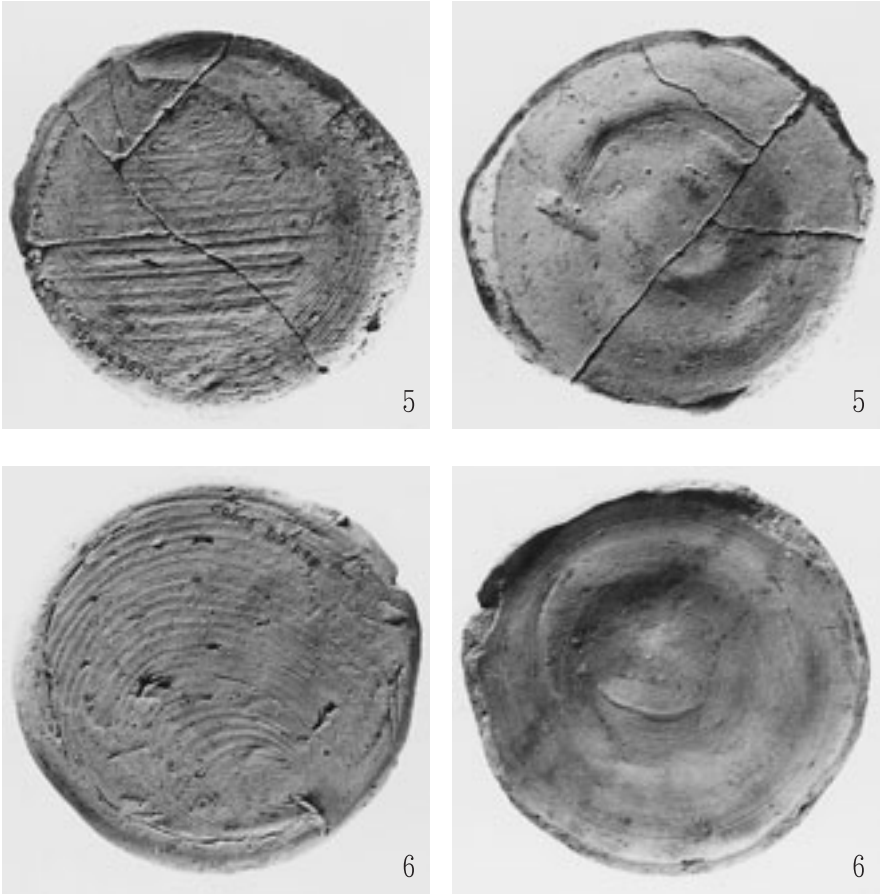


(4)　方形周溝遺構出土　須恵器・陶磁器





(5)　方形周溝遺構出土　円形土器片



(6)　方形周溝遺構出土　円形土器片

報　告　書　抄　録

ふりがな	しものはるいせき
書名	下の原遺跡
副書名	福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第52集
編集者名	吉田浩之
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816-0804　福岡県春日市原町３丁目１番地５　TEL　092-584-1111
発行年月日	西暦　2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下の原遺跡（しもはるいせき）	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし） 下白水北５丁目（しもしろうずきた） 86、87、88、89番地	40218		33° 31′ 45″	130° 26′ 29″	2006.8.21 ～ 2006.9.29	238㎡	個人分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下の原遺跡	墓地	中世	方形周溝遺構　１基 掘立柱建物跡　１棟 井戸　１基 溝状遺構　１条	土師器 須恵器 陶磁器 円形土器片	中世の方形周溝遺構が検出され、信仰の対象地として重要な場所だったと思われる。周辺に中世の集落が存在する可能性がある。

要約	古墳時代の前方後円墳、下白水大塚古墳の南に近接する遺跡。これまで周辺では、発掘調査が行われておらず、どのような性格の遺構が分布しているか不明な地域であった。以下では、主な成果を述べる。下の原遺跡は、中世の方形周溝遺構を検出した。これまで、中世の方形周溝と思われる区画が春日市内でも検出されているが、その遺構の性格は不明な事が多い。全国的にも広く分布が認められるが、主に区画墓として扱われている。下の原遺跡では、中央部に墓壙が確認されず、明確に墓であるという根拠はないが、円形土器片の出土、陸橋と井戸の配置などから、ある種の信仰の場として使用されていたと推測される。中世集落との関係性が重要になるため、今後の周辺の調査に注意を要する必要がある。

下の原遺跡

春日市文化財調査報告書
第52集

平成20年３月31日

発　　行　　春日市教育委員会

福岡県春日市原町３丁目１番地５

印　　刷　　山口印刷株式会社

佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5